波佐見中学校学校便り

第 13 号
編集・発行
波佐見中学校
校長 池本敦司

79回目の夏

令和6年度　波佐見中学校平和集会

波佐見中学校の平和について説明する３年生

１９４５年８月９日。あの日も今のように暑い日だったのだろうか。広島と長崎に原子爆弾が投下されて今年で79年。あの時亡くなられた多くの犠牲者のそれぞれの思いや人生を想像すると、胸が痛くなる。今、私が平穏に暮らすことができているのはなぜか。もしも自分が理不尽ともいえる原子爆弾で命や健康、家族や友人を奪われるとしたらどんな感情が沸き起こるのか。

私は、北九州で生まれ育った。北九州と長崎は、原爆投下予定地と実際に投下された地ということでつながりがある。長崎に投下された原子爆弾は当初、北九州の小倉に投下される予定だった。しかし、８月９日の投下予定時刻、小倉の上空は厚い雲に覆われ、米軍は投下予定地を目視できなかったそうである。45分間旋回したものの天候は回復せず、原子爆弾を積んだ爆撃機は第２投下予定地であった長崎に向かい、原子爆弾を投下するのである。

自分が子供のころ８月９日の平和学習で、長崎原爆の被害を写したパネルを見て「もしも小倉に原子爆弾が投下されていたら、どうなっていたのだろうか」想像して漠然と恐怖を感じていたことを思い出す。

原爆が実際に落とされた長崎の方々が体験したことや原爆に対して抱く感情は、私が子供のころに感じたものとは比べ物にならないくらいつらく、ひどく、苦しいものだろう。

たった、一発の原子爆弾で、多くの人々が自分が思い描く夢や希望を絶たれた。そんなことが実際に起こったのである。私たちにできることは、その事実に目を向けること。そしてそこから湧き上がる感情・感覚を大切にすること。さらに、可能な限り自分事としてとらえることだと思う。いつもなら意識することが少ない11時２分。波佐見中学校の皆さんと過ごせる当たり前の日常に感謝しながら迎えたいと思う。

平和への祈り

平和集会のなかでＮＢＣ平和文学朗読を鑑賞しました。永井隆編「原子雲の下に生きて～長崎の子供らの手記」と原爆を投下したアメリカ兵チャールズスウィーニー氏の手記「私はヒロシマ・ナガサキに原爆を投下した」を朗読劇に構成し、アナウンサーの方々が思いを込めて朗読するものです。原子爆弾が投下された長崎市。一瞬の判断で防空壕の一番奥に飛び込み、生き延びた少年が見た光景、感じたこと、原爆を落とした側のアメリカ兵のその時置かれていた状況や原爆投下についての思いや考えが頭に映像として浮かんでくる内容でした。

「もう一度、昔に返して」「みんなが生きていたら」ここにも原爆によって一瞬にして日常が奪われた方々の切なる思いを感じました。

今、世界で起こっている戦争や紛争も終わってほしい。みんなが笑顔で暮らせる世界であってほしい。11時２分。静かに黙とうを行いました。

平和集会を行ってくれた実行委員のみなさん、ありがとうございました。

忘れ物を届ける際には

正面玄関の公衆電話で時折見かける「忘れ物を持ってきて！」と電話する生徒の姿。生徒に渡される際には、直接教室に持っていかれるのではなく「事務室」もしくは「職員室」に一声おかけください。職員のほうで対応します。

生徒の皆さんは、できれば、忘れ物を届けてもらわなくてもいいように準備を整えよう！

校長日記

８月９日は夏休みの折り返し地点。前半は県中総体や三者面談、部活動の練習などでゆっくりできていない人も多いのでは？▼数年前からお盆期間は学校閉庁日として原則完全にお休み。家族で出かけたり、親戚が帰省したり、花火をしたり…▼それらは「日常」ではない「非日常」の時間。ずっと続かない「非日常」の時間はあっという間に過ぎてしまう。でもその時間があるから「日常」は豊かで充実したものになる▼２学期という「日常」まで残り20日ほど。とにかく大きな事故なく、皆さんが元気に２学期が迎えられますように。